

2003年11月16日

信仰が果たして役にたつのか—人生の原点に立つ

[聖書]イザヤ書 30章 15節

15 まことに、イスラエルの聖なる方／わが主なる神は、こう言われた。「お前たちは、立ち帰って／静かにしているならば救われる。安らかに信頼していることにこそ力がある」と。しかし、お前たちはそれを望まなかった。

31章 1～3節

1 災いだ、助けを求めてエジプトに下り／馬を支えとする者は。彼らは戦車の数が多く／騎兵の数がおびただしいことを頼りとし／イスラエルの聖なる方を仰がず／主を尋ね求めようとしない。2 しかし、主は知恵に富む方。災いをもたらし／御言葉を無に帰されることはない。立って、災いをもたらす者の家／悪を行う者に味方する者を攻められる。3 エジプト人は人であって、神ではない。その馬は肉なるものにすぎず、霊ではない。主が御手を伸ばされると／助けを与える者はつますき／助けを受けている者は倒れ、皆共に滅びる。

[序]絶対絶命の時に

絶対絶命のピンチに立たされた時に、どうしたらよいでしょうか。日本では自殺するひとが毎年3万人を超えています。本人がどんなに苦しかったことか。しかし残された家族の衝撃もどんなに深いものかが、よく報道されています。どうかそのことも考えて思い直して欲しいという、新聞の切なる訴えだと思えます。

聖書は、神さまがどういうお方か、どのように我々人間を救おうと働くお方かを、小さなユダヤ民族の歴史を通して証している書物です。預言者イザヤの時代に、エルサレムの都が、当時の大帝国アッシリアの大軍に攻撃されました(BC701)。近隣の小さな国々は皆征服されています。絶対絶命のピンチに立たされました。

その時小さなユダ王国はどうやって生き延びたのでしょうか。その危機に際して**信仰**がどんな役割を果たしたのでしょうか。

[1]歴史を動かした神

ユダの王ヒゼキヤは南の大国エジプトに多額の貢物を贈って、助けてもらおうとしました。しかしエジプトの援軍が動く前にアッシリア王が攻めて来てしまいました。アッシリア王の使者ラブシャケは、大軍を後ろ盾にしてエルサレムの住民に聞こえる大声で大王の言葉を伝えました。

「ヒゼキヤに伝えよ。大王、アッシリアの王はこう言われる。なぜこんな頼りないものに頼っているのか。ただ舌先だけの言葉が戦略であり、戦力であるのかとわたしは言う。今お前はエジプトというあの折れかけの葦の杖を頼みとしているが、それはだれでも寄りかかる者の手を刺し貫くだけだ」(36:4～6)。

「ヒゼキヤが『主が我々を救い出して下さる』と言っても、惑わされるな。諸国の神々は、それぞれ自分の地をアッシリア王の手から救い出すことができたであろうか。——これらの国々のすべての神々のうち、どの神が自分の国をわたしの手から救い出したか。それでも主はエルサレムをわたしの手から救い出すと言うのか」(36:18~20)。

エジプトは折れかけた葦の杖のようなもので、頼りになるどころか寄りかかる者の手を傷つける者でしかないと言っています。アッシリアは近隣の諸国を、その神々もろともに滅ぼしてきました。アッシリア王の前には神々はみな無力でした。お前たちの神だけは例外で、エルサレムを救い出せるというのか。無力な神にだまされるなど言っています。

ヒゼキヤ王は、衣を裂き粗布をまとして神殿で祈りました。預言者のイザヤにも祈ってほしいと頼みました。イザヤの答はこうでした。「主なる神はこう言われる。あなたはアッシリアの王の従者たちがわたしを冒瀆する言葉を聞いても、恐れてはならない。見よ、わたしは彼の中に霊を送り、彼がうわさを聞いて自分の地に引き返すようにする。彼はその地で剣にかけられて倒される」(37:6~7)。

では歴史はどう動いたのでしょうか。37章36節以下(列王記下19:35以下)によりますと(1)アッシリアの大軍185000人が一夜にして壊滅したこと。(2)センナケリブ王はニネベに引き返したこと。(3)彼は神殿で礼拝中に二人の息子によって殺されてしまったこと、という三つの出来事が起こったのでした。そしてヒゼキヤ王とその国は守られたのでした。

(1)アッシリアの大軍がどうして壊滅したのでしょうか。ヘロドトスの歴史によると、アッシリア軍と戦っていたエジプト軍が、野ねずみの大群に襲われて弓矢を食い荒らされて戦闘できなくなり、大敗を喫したという記録があるそうです。ですからアッシリア軍も、この時突然、野ねずみの大軍に襲われてペストなどの疫病が発生し、大勢の死者が出たのではないかという説があります。

(2)ニネベで王位継承をめぐる反乱が起ったといううわさが届き(37:7)、王が急いで引き上げていったのではないかという説もあります。そしてセンナケリブ王は二人の息子に暗殺されてしまったといわれています。

アッシリア軍は、185000人の死者が出たとあります。こんな大軍に攻撃されたらどんな城壁に囲まれた要塞でも、破壊されるでしょう。センナケリブ大王は、神々も自分に立ち向かえなかったと、威張っていました。ユダ王国にとってはまさしく絶体絶命のピンチでした。ところがその大軍が戦わずして崩壊し、王が引き上げていき、後に暗殺されてしまったのです。こんな結末を誰が予想出来たでしょうか。

しかしイザヤはこの危機の最中に神の言葉を聞きとりました。「恐れてはならない。見よ、わたしは彼の中に霊を送る」。霊を送るとは、私たちの目には見えない神さま、霊なる神さまご自身が介入して、歴史を動かすという意味でしょう。神さまの働きは私たちの思いが全く及ばない、まさに奇跡とし

か言いようのないものなのです。アッシリア王が馬鹿にしたヒゼキヤ王の言葉「主は我々を救い出してくださる」の通りになりました。

[2] 静まって力を捨てる

30、31章はエジプトと同盟を結んで助けてもらおうとした時のイザヤの預言です。31章から先に取り上げます。「災いだ、助けを求めてエジプトに下り、馬を支えとする者は。彼らは戦車の数が多く、騎兵の数がおびただしいことを頼りとし、イスラエルの聖なる方を仰がず、主を尋ね求めようとしない」(31:1)。

古代エジプト帝国の強さは、馬と馬にひかせる戦車隊や、騎兵隊にありました。ユダはエジプトの馬と戦車隊、騎兵隊に頼って、アッシリアに対抗しようとしたのでした。しかしイザヤは言います。「エジプト人は人であって、神ではない。その馬は肉なるものにすぎず、霊ではない」(3節)。「神・霊」と対比されている「人・肉」とは弱くて脆いという意味で使われています。そんなものを当てにしたら、「皆共に滅びる」と警告したのでした。

ではどうしたらよいのでしょうか。30章15節をご覧ください。「まことに、イスラエルの聖なる方、わが主なる神は、こう言われた。『お前たちは、立ち帰って、静かにしているならば救われる。安らかに信頼していることにこそ力がある』と」。エジプトの助けを求めずに、ただ神さまだけを信じて、静かに神の助けを待つ姿勢を貫くように。そうしたら救われるというのです。

イザヤは以前にもシリアと北王国との連合軍が攻めてきた時にも、同じ預言を語っています。「落ち着いて、静かにしていなさい。恐れることはない」(7:4)。イザヤの預言は終始一貫していたのです。

宗教改革者マルチン・ルターの愛唱した賛美歌、宗教改革の軍歌をご存知ですか。

神はわがやぐら わがつよき盾 苦しめるとき 近きたすけぞ
おのが力 おのが知恵を たのみとせる 陰府の長も などおそるべき

いかに強くとも いかでか頼まん やがては朽つべき 人のちからを
われと共に 戦いたもう イエス君こそ 万軍の主なる あまつ大神
(教団賛美歌267)

この賛美歌のもとになった詩篇46編に有名な言葉があります。「力を捨てよ、知れ、わたしは神。国々にあがめられ、この地であがめられる」(11節)。口語訳では「静まってわたしこそ神であることを知れ」。静まっの原語は「捨てる、弱くする、沈む」です。そこで新共同訳は力を捨てよと訳したのでしょう。

川や海で溺れかけている人を助けようとした人が、しがみつかれて二人とも溺れ死んでしまう事故がよく起こります。恐怖にかられて必死にしがみつかれると、泳ぎの達人でもどうしようもなくなる

のです。そこで助ける人は溺れかけている人を水の中に引きずり込んで、水を一杯飲ませてぐったりさせてから、抱えて泳ぐようにするのだそうです。

「一旦沈ませて、力を捨てさせ、弱くしてから、救い出す」。なるほど人が救われるためには、この方法が有効なのですね。だから神さまは、**静まれ、力を捨てよ**とおっしゃるのです。**知れ、わたしは神**。知れは**体験しろ**という動詞です。神さまは全能者、どんなことでもお出来になる方、そして弓を砕き、槍を折り、救い出してくださるお方であることを、あなたも体験しなさいという呼びかけです。

イスラエルの民は、**民族誕生の原点**を持っていました。それが**出エジプト**です。エジプトの奴隷に落ちぶれてしまった 60 万人が、モーセの指揮のもとにエジプトを脱出しました。エジプト王が戦車隊を総動員して追いかけてきました。紅海のほとりで追い付かれます。前は海、後は戦車隊・騎兵・歩兵の大軍。絶体絶命のピンチでした。

その時モーセが言いました。「**恐れてはならない。落ち着いて、今日、あなたたちのために行われる主の救いを見なさい。**——主があなたたちのために戦われる。あなたたちは**静かにしていなさい**」(出エジプト 14:13~14)。**落ち着いてはしっかり立つ。静かにするは沈黙する、無口になる**ことです。恐怖にかられてやたらに動き回ったり、わめいたりしないで、**神さまの戦い振り**をじっと見つめていよう。これは**神さまの戦い**なのだからというのです。

この時、神さまは激しい東風を一晩中吹かせて紅海の水を退かせ、海の中に浅瀬の道と作って、イスラエルの民を向こう岸に渡らせてくださいました。神さまは大きな力を振るって、ご自分の民を**必ず救い出してくださる**という民族としての体験を、**信仰の原点**としてお与えになったのでした。

絶対絶命の危機に立たされた時に、ただ静かに落ち着いていなさいと言われても、それは出来ません。しかしこの原点に立ち帰るならば、神さまに対する信頼が甦ってきて、静かに落ち着くことができるはずです。だから神さまは、イザヤを通して「お前たちは、**立ち帰って、静かにしている**ならば救われる。安らかに信頼していることにこそ力がある」と語りかけられたのでした。

[結]未だ残されている救いの道

神さまを信じて生きるということが、果たして**人生の確かな拠りどころ**になるのでしょうか。「ヒゼキヤが『主は我々を救い出してくださる』と言っても**感わされるな**」とアッシリア王の使者は叫びました。圧倒的な富・権力・武力の前には、見えない神を信じて生きるなど、空しく思われます。ヒゼキヤ王も国を預かる責任者として、イザヤの言葉を聞きながらも、エジプトの力に頼る**現実策**をとり、かえって窮地に陥ってしまいました。

私たちが同じではないでしょうか。仕事にいきずまった時に、何とかしてピンチを脱出しようと、いろいろ策をろうしたり、人に頼ったりします。夫婦・親子・友人・同僚などとの関係がうまくいかなかった時もそうです。それでうまく解決できるならば、それでよい。それでもどうしよもなくなった時、そ

れが万策尽きた、絶対絶命の危機です。

絶望して自殺・無理心中するのですか。自暴自棄になって責任放棄するのですか。「苦しい時の神頼み」。結構です。神さまに頼る道が未だ残されているのです。但し人の苦しみにつけこんで、自分が肥え太るいんちきな神にひっかからないようにしましょう。イエス・キリストがはっきりと指し示している真の神さまをお信じください。私たちに命を与えるために、ご自分が十字架にかかって命を投げ出して下さった神さまだからです。ここにこそ本当の愛があります。

命にかけて私たちを救おうとしてくださる愛の神さまですから、必ず命の道を開いてくださいます。一晩中激しい東風を吹かせて海の中に浅瀬の小道を造って下った神さまです。18500 人の大軍の中に霊を送って、疫病なのか謀反のうわさなのかわかりませんがとにかく大王を引き上げさせてしまった神さまです。奇跡としか言いようのない働きで私たちを必ず救い出してくださいます。

無力な神々にだまされるなど威張ったアッシリアの大王は、憐れにも息子たちに殺されてしまいました。しかも自分の神ニクロスの神殿で礼拝している時にです。自分を神以上の者だと傲慢になっている彼がどんな神を礼拝し、何を祈ったのでしょうか。所詮人間ははかない者です。「エジプト人は人であって、神ではない」とイザヤは言いました。まさにその通りです。

エジプトの大戦車隊は、紅海の海のまん中で滅びました。アッシリアの大軍も疫病で壊滅してしまいました。「その馬は肉なるものにすぎず、霊ではない」。そうです。イザヤの言う通りです。「主が御手を伸ばされると、助けを与える者はつまずき、助けを受けている者は倒れ、皆共に滅びる」。私たちが本当に頼りにすべきお方は、神さまなのです。

先週学びましたように、神さまは私たちと全く質を異にするお方、私たちの思いも及ばない心と力を持つ聖なるお方です。その聖なる神さまが、今日も呼びかけておられます。「お前たちは、立ち帰って、静かにしているならば救われる。安らかに信頼していることにこそ力がある」。

どうか神さまのもとに立ち帰って、すべてをお委ねするという原点に立ちましょう。日曜日ごとに礼拝を守るというのも、原点に立ち返る行為です。イザヤはこの呼びかけの後でこう言っていますね。「しかし、お前たちはそれを望まなかった」。そうです。私たちは自分がなんとかやれている間は、「信仰なんて」といいます。でも神さまの呼びかけを心に留めておいてください。万策尽き絶対絶命の時になったら、直ちに立ち帰ってください。神さまは待っておられます。 完